

子規の追憶

寺田寅彦

青空文庫

子規^{しき}の追憶については数年前『ホトトギス』にローマ字文を掲載してもらったことがある。今度これを書くのに参考したいと思って捜したが、その頃の雑誌が手許^{てもと}に見当らない。とにかく同じような事を二度は書きたくないから、前に書かなかったと思うことだけを記すことにする。

一

自然科学に関する話題にも子規はかなりの興味を有^もつて居たように思われる。当時自分は訪問してそういう方面のどんな話をし

ていたかは思い出せないが、ただ一つ覚えていることがある。あの時颯たいふう風の話からそのエネルギーの莫大なこと、それをどうかして人間に有益なように利用するようになりたいというようなことを話したら、大変にそれを面白がった。暴風のを避けようというのではなくて積極的にそれを利用するというのは愉快だと云つて喜んでいた。

写生文を鼓吹こすいした子規、「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生していると造化の秘密がだんだん分つて来るような気がする」と云つた子規が自然科学に多少興味を有つという事は当然であつたかも知れない。

『仰臥ぎようがまんろく漫録』に「顕微鏡にて見たる澱粉でんぷんの形状」の図を貼

込んであるのもそういう意味から見て面白い。

とにかく、文学者と称する階級の中で、科学的な事柄に興味を有ち得る人と有ち得ない人とを区別する事が出来るとしたら子規はその前者に属する方であつたらしい。この事は子規という人とその作品を研究する際に考慮に加えてもいいことではないかと思う。

二

学芸の純粹な進展に対して社会的の拘束が与える障害について不満の意を洩らすのを聞かされた事も一度や二度ではなかつたよ

うに記憶する。例えば美術や音楽の方面においていわゆる官学派の民間派に対する圧迫といったようなことについて、具体的の実例をあげていわゆる官僚的元老の横暴を語るものであったが、それがただ冷静な客観的の噂話でなくて、かなり興奮した主観的な憤ふ懣まんを流出させるのであった。どういう方面からそういう材料を得ていたかまたその材料がどれだけ真に近いものであったかは自分には全然分らない。しかし故人がそういう方面の内幕話に興味を有ち、またそういう材料の供給者を有っていた事はたしかである。

子規は世の中をうまく渡って行く芸術家や学者に対する反感を抱くと同時に、また自分に親しい芸術家や学者が世の中をうまく

渡る事が出来なくて不遇に苦しんでいるのを齒痒はがゆく思っていたかのように私には感ぜられる。

三

ある時西洋の小説の話から始まってゾラの『ナナ』の筋も私に話して聞かせた。それから、何という表題の書物であつたか、若い僧侶が古い壁画か何かの裸体画を見て春の目覚めを感じるという場面を非常にリアルな表現をもって話して聞かせた事があつた。その時の病子規は私には非常に若々しく水々しい人のように感ぜられた。

私は『仰臥漫録』を繙ひもといて、あの日々の食膳の献立を読む事に飽きざる興味を感じるものである。そうしてそれを読みながら、まだどういいうわけか時々このゾラの小説の話の思い出すのである。ほとんど腐朽に瀕した肉体を抱えてあれだけの戦闘と事業を遂行した巨人のヴァイタルフォースの竈かまどから迸ほとばしる火花の一片二片として、こういう些細な事柄もいくらかの意味があるのではないかと思われるのである。

四

子規の家から不折ふせつ氏の家へ行く道筋を画いて教えてくれたもの

が唯一の形見として私の手許に残っている。それは子規氏の特有の原稿用紙（唐紙とうし？）に朱罫しゆけい、十八行二十四字）いっぱい画いた附近の略地図である。右上に斜に鉄道線路が二本引いてある。うぐいすよこちよう

鶯横町は右下半に曲線を描いて子規庵は長さ一センチくらい
のいびつな長方形でしるされてある。図の左半は比較的込み入
つていて、不折邸附近の行きづまり横町が克明に描かれ「不折」
「浅井」両家の位置が記入されている。面白いことは横町の入口
の両脇の角に「ユヤ」「床ヤ」と書いてある。それから不折邸の
横に「上根岸四十番」と記し、その右に大きな華表とりいを画いて「三
島神社」としてある。ずっと下の方に門を書いて、「正門」とし
てあるのは前田邸の正門であろう。

脚腰の立たない横に寝たきりの子規氏の頭脳の中にかなり明確に保存されていた根岸の地理の一つの映像としてこれも面白いものの一つであろうと思う。この辺も区劃整理で昔の形が消えてしまいかどうか知りたいものである。

今久し振りにこの図を取出して見ていると三十年前の子規庵の光景がありありと思い出される。御院ごいんでんざか殿坂ひぐらしに鳴く蝸ひぐらしの声や邸後を通過する列車の騒音を聞くような心持がする。

(昭和三年九月『日本及日本人』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第二巻」岩波書店

1985（昭和60）年9月5日第3刷発行

初出：「日本及日本人 第一六〇号」

1928（昭和3）年9月19日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子規の追憶

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>